

## 授業のユニバーサルデザイン化に関する研究の今後の発展にむけて —実践から研究へ、研究から実践へ—

涌 井 恵

約10年前から、発達障害のある子どものいる通常の学級において、指導・支援に「ユニバーサルデザイン (universal design)」の考え方を取り入れることが注目されるようになってきた。佐藤 (2007) は、通常学級におけるユニバーサルデザインとは、「特別な支援が必要な児童生徒だけでなく、どの子どもにも過ごしやすく学びやすい学校生活・授業を目指すこと」と定義している。また桂 (2016) は、授業のユニバーサルデザインとは、「特別な支援が必要な子どもを含めて、通常学級の全員の子どもの、楽しく学び合い『わかる・できる』ことを目指す授業デザイン」であるとしている。校内研究のテーマとして授業のユニバーサルデザインを取り上げる学校も増えており、その具体的な実践例の報告や学術論文の発表も散見されるようになってきた。

さて、京極氏の実践報告は、授業のユニバーサルデザイン化の実践が「教科の本質に迫るものになっているか」「目の前の子どもの実態に正対しているのか」といった指摘に対して、ユニバーサルデザインの授業づくりに単元指導計画が果たす役割に着目し、その検討から、教科の本質や子どもの実態に正対するにはどのような取組が必要なのかを考察している。1コマの授業に留まらずに、単元、あるいは小中学校9年間の系統性という長期的な視座から、授業のユニバーサルデザイン化をどのように深めていったらよいかについて論考している点はとても意義深い。

ただし、本実践報告によって指摘されたポイントについて真に効果があるとするには、量的、質的に結果をより客観的な観察手法によって測定し、ま

た、複数の事例における追証が今後必要であろう。授業のユニバーサルデザイン化については、学術的な研究としてはまだ黎明期にある。どのような手法や要因が効果をもたらす、学級内のどの程度の学力差のある学級集団に適用可能なのか、どんな障害のある子どもが参加しても、有効であるのか、その適用対象範囲の限界や条件などはまだ明らかになっていない (柘植, 2011)。ユニバーサルデザインの授業は全員が「わかる・できる」授業をめざしているのだから、障害があるなどして特別な支援が必要な子どもだけでなく、学級の他の子どもたちの学習到達度についても実証的な検証をする必要があるだろう。研究はまだ少なく知見の蓄積は十分でない。

教育を対象とした研究の深化には実践者との協働が不可欠である。京極氏は授業のユニバーサルデザイン研究の先進校である日野市立日野第三小学校の校長として、学校経営や校内研究・研修をマネジメントしてきた経歴の持ち主である。京極氏の長年の経験と深い見識から見いだされたポイントについて、今後、追証し、実践から研究へ、研究から実践へと往還していく営みを積み上げていくことが、この研究分野の今後の課題となるだろう。

### 【文献】

- 桂 聖 (2016) : 日本授業UD学会のグランドデザイン。授業UD研究, No.00. 2-5.
- 柘植雅義 (2011) : 通常学級における授業ユニバーサルデザイン。特別支援研究, No.652. 4-6.
- 佐藤慎二 (2007) 提言: ユニバーサルデザインの授業づくりのために。特別支援研究, No.596. 32-37.